

大阪の夏祭り調査

黒田 一充

(1) 「愛染さんから住吉さんまで」

大阪の夏祭りという最初に連想するのは、「愛染さんから住吉さんまで」という言葉である。これは、6月30日に行われる四天王寺別院の勝鬘院愛染堂の愛染祭の宝恵駕籠行列に始まって、8月1日に行われる住吉大社の住吉祭までの約1か月間に、大阪では夏祭りが盛んに行われていることを示す言葉である。宝恵駕籠行列と天神祭の船渡御は毎年マスコミなどで紹介されているが、それ以外の夏祭りについては、街角に提灯が吊されたり、祭りを知らせるポスターが掲示されたりしているのを目にすることはあっても、具体的な様子については、地元の人以外にはよく知られていない。

このような状況であるため、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター祭礼遺産研究プロジェクトの最初の研究課題として、現在どこで、どのような夏祭りが行われているかを、実際に調査してみることにした。

「愛染さんから住吉さんまで」という言葉は、厳密にいうと大阪市内の夏祭りを指していると思われるが、この調査では、大阪市内だけではなく、大阪府下の市町村の祭りも調査をすることにした。

まず手始めに、祭りの日程を調べるため、大学院生たちが中心となって夏祭りカレンダーの作成に取りかかった。これまで、まとまった大阪の祭りの紹介をしたものとしては、雑誌『大阪春秋』の特集記事をはじめ、大阪府神道青年会が発行した『大阪の祭り』（1980年）、全国の祭りを紹介するシリーズの1冊として発刊された『祭礼行事・都道府県別 大阪府』（1993年）、昨年ガイドブックとして発刊された『大阪の祭』（2005年）などがある。

特に大阪府神道青年会の本は、巻末に府下の各神

社の祭りの日程が網羅されているため、非常に便利ではあるが、愛染祭などの寺院に関わる祭りについては記載がないことや、25年前の刊行のため、祭りの日程が大幅に変わっているという問題がある。

さらに、カレンダーとしてまとめるには、ある程度掲載する祭りの数を絞る必要がある。そのため今回は、祭りを選び出す手段として、大阪府下の各市町村の市町村史、大阪府と市町村の役所および商工会など観光関係機関のホームページ、鉄道などの交通機関の広告誌やホームページなどを用いた。そのため中には、千早赤阪村役場のホームページで紹介されていた金剛山の蓮華祭のように、大阪府と奈良県の境界に位置する場所で祭りが行われるものも含まれている。

こうしてカレンダーをまとめてみると（36～37ページ）、7月上旬と下旬に少し空き日はあるが、祭りの日程には極端な片寄りは見られず、連日どこかで祭りが行われていることがわかる。10月の秋祭りが、氏子の中に会社に勤める人が多くなったことから、日程を近い土・日曜日に動かし、神社内の神事と神輿や地車を出す日を別にしたりする傾向が非常に強くなっているのに対し、大阪の夏祭りでは、日曜日に行われるようになったところは少なく、ほとんどがもとの日程のままで行われている。

(2) 夏祭りの特徴

大阪の夏祭りの現況を紹介する前に、夏祭りの特徴をもう少し考えてみたい。四季折々に祭りは行われているが、柳田国男が『日本の祭』や『祭日考』で指摘したように、もっとも古くから行われていたのは、春祭りと秋祭りだと考えられる。春祭りは、その年の農作物の稔りを祈願する祭り、祈年祭で

ある。伊勢神宮でも、平安時代初期の儀式帳に、2月初子日に御田に種を蒔く儀礼が行われていたことが見える。また、10世紀初めに編纂された『延喜式』神名帳に記載された神社、いわゆる式内社も、祈年祭の際に中央政府や国司から使者が派遣された神社である。神社名の下に「月次・新嘗」などの割注の記載があり、月次祭や新嘗祭に使者が派遣された神社を別に記していることから、律令政府は春祭りを特に重要視していたことがわかる。

現在でも各地の神社に、御田植祭りが残っている。これは、年の初めに拝殿の中で、田を耕すまねや初を撒くまね、松葉を稲の苗に見立てて田植えを行うものだが、農作業の所作を一通り行うことで豊作をあらかじめ祝う、予祝の儀礼である。大阪市平野区の杭全神社で行われている4月の御田植祭りも、もとは1月の祭りであった。

それに対して収穫が終わると、豊作を感謝する秋祭りが行われる。伊勢神宮では、9月に神嘗祭が行われており、旧暦9月すなわち新暦の10月には各地で盛んに秋祭りが行われる。嘗めるといのは食べることであり、収穫した米を神と一緒に食すのが秋祭りということになる。

春祭り、秋祭りについて、冬祭りが発生したと考えられている。新嘗祭も、もともと旧暦11月の冬の祭りである。冬至のころで、太陽の光が一番弱くなるため、火を焚く行事も多い。12月の大阪府堺市・石津太神社のやっさいほっさい祭りでは、大阪湾から上陸してくる戎神を迎えるために薪を積んで、火を燃やす。また、大阪府下ではないが、全国的には農作業の慰労と村人の交流を兼ねて、一晚中神楽や芸能などが奉納される。特に、山間部に多く、春を待つ気持ちの強い表れだと考えられている。

四季の祭りの中で、一番新しく発生したのは、夏祭りだという。夏は疫病や飢饉が発生しやすいため、それらを防ごうとする意味合いが非常に強い祭りだと考えられている。柳田国男は、夏祭りが水辺で行われることが多いことから、もともとは農業でもっとも必要な水の確保のため、水の神に祈ることが始まりだったのではないかと述べた。それが、政治の争いで敗れた人物が、死後にその恨みを晴らすために祟りを起こすと考えられるようになり、夏の日照りや疫病の発生と関連づけられて平安時代に御霊信仰が発生し、それが夏祭りとなっていったのだ

としている。

さらに、祭りの大きな変化として、祭りの参加者の中に信仰を同じくしない人びと、すなわち見物人が登場したことがあげられる。彼らから見られているということ意識し、祭りに見世物的な要素が増えてくる。本来神霊の移動である神幸は、夜中の闇の中で行われるものであり、京都の賀茂祭の御阿礼神事や奈良の春日若宮祭の神幸は、現在も真夜中に行われている。しかしそれが、次第に昼間の行事になっていき、神霊の移動も、神霊が依りついた榊の枝や御幣、鏡などを神職が抱いたり、馬に載せて運んでいたものが、神輿に変わり、さらに豪華な飾りも付けられるようになる。さらに山車や鉦・地車といったものも登場し、にぎやかな鉦や太鼓で囃しながら災厄を追い払うようになる。こうして、祭りは祭礼へと変化していく。そういった多数の見物人たちが集まるのが、都市の祭礼の大きな特徴である。

江戸時代の三大都市は、江戸・大坂・京都であり、日本三大祭りも、京都の祇園祭、大坂の天神祭、江戸は神幸祭が毎年交代で行われていた神田明神の神田祭と日枝神社の山王祭を指す。祇園祭は山鉦巡行、天神祭は船渡御が祭りの中心行事である。神田祭と山王祭は、現在は神輿が中心になっているが、江戸時代には山車が出されて将軍が上覧し、多くの見物人が参加した。

京都の祇園祭は、7月17日の山鉦巡行と四条寺町の御旅所への神輿渡御から24日の神社への還幸までの期間を中心にして、1日の吉符入りから31日の夏越の祓えまで1か月間にわたる祭りである。この祇園祭の印象が強いため、京都では夏祭りが盛んであるように思われる。しかし、伏見稲荷大社の稲荷祭や松尾大社の松尾祭、藤森神社の藤森祭など、広い氏子区域の人びとが参加して神輿が出される祭りは4月から5月に行われており、春祭りの方が盛んである。京都では、夏越の祓えなどは別にして、それほど盛んに夏祭りが行われているとはいえない。

また、7月の東京の祭りや年中行事は、1日に富士講が行われる。都内各地には、富士塚と呼ばれる富士山を模した小山が残っており、山開きとしてそれに登る。7日前後に入谷の鬼子母神のアサガオ市、10日には浅草の浅草寺のホオズキ市、下旬には隅田川での両国の花火大会が行われるほかは、15日を中心にして閻魔祭や施餓鬼供養など盆行事が行わ

れる。

関西などでは、旧暦7月の盆は、1か月遅れの新暦8月になっているが、関東ではそのまま新暦に変わったため、新暦7月が盆行事の月になっている。牛頭天王を祭る祇園祭や天王祭は、旧暦6月15日の行事だったため、東京では今も新暦6月に天王祭が行われる。日枝神社の山王祭の日程も6月15日の前後である。

ところが、神田明神の神田祭は、もともと9月の祭りで、明治になって台風や疫病流行の時期を避けるという理由で5月中旬に変更された。数多くの神輿が出ることで有名な浅草の三社祭も5月下旬であることから、東京の祭りは5月から6月の初夏の季節が中心であり、大阪のように猛暑の中で祭りをを行うのとは、大きな違いがある。

(3) 近世大坂の夏祭り

大阪の夏祭りが、旧暦6月をそのまま新暦の7月に変えて行われていることは先に述べたが、それでは江戸時代の夏祭りはどのようなものが行われていたかを見てみたい。その資料として、『摂陽奇観』『摂津名所図会大成』など、『浪速叢書』に収録された近世史料から、大坂・堺の夏祭りの名称と日程(旧暦)を原文のまま抜き出して紹介したい。

- 6/1 勝曼愛染祭、太融寺愛染祭り
- 6/5 長州蔵屋敷鎮守祠例祭
- 6/6 堺光明院役行者萬燈會
- 6/7 祇園會駕輿丁神役、本庄鹿島神祠夏祭
- 6/8 堺北莊稻荷夏祭
- 6/9 堺湯屋町権現祭
- 6/10 堺戎鳥戎宮夏祭
- 6/12 堺三村宮夏祭
- 6/14 祇園會駕輿丁神役、土佐堀船玉神祠、難波祇園社夏祭、堺向泉寺牛頭天王夏祭、平野牛頭天王社、住吉潮湯、住吉泥湯
- 6/15 天王寺講堂蓮華會、阿波蔵屋敷二井神祠例祭、三津八幡宮荒和大祓、堺天神夏祭
- 6/16 高津まつり、稻荷夏神樂、乾社夏祭、内平野町神明夏祭、曾根寄神明例祭、堺神明宮夏祭
- 6/17 御霊神社夏祓神事、鍋島蔵屋敷稻荷神祠例祭

- 6/18 高津神社夏祭
- 6/20 いなり祭
- 6/21 上難波仁徳天皇宮例祭
- 6/20 曾根寄露天神祠例祭
- 6/22 天王寺太子堂縁日法事、座摩神社夏祓神事
- 6/24 堺引接寺愛宕千日詣、和霊社例祭
- 6/25 天満天神社例祭、上福島天神例祭、中福島天神例祭、下福島天神例祭、筑前橋宰府天満宮例祭
- 6/27 堺光明院不動萬燈會
- 6/28 生玉神社夏祭
- 6/29 内平野町神明夏越大祓
- 6/末 玉造豊津稻荷夏祭、森宮夏越大祓、九條茨住吉神社夏祭、佃島住吉神社例祭、住吉火替之神、住吉荒和大祓、永代濱住吉祭、堺宿院御旅所住吉大神宮渡御

(太字は、今回現地調査をした祭り)

今宮の神人が京都の祇園祭に参加して神輿を担ぐ6月7日と14日の祇園會駕輿丁神役や、住吉の潮湯や泥湯は現在なくなっており、6月28日の生玉神社夏祭が現在は7月12日になるなど、日程が移動しているものもあるが、ほとんどの祭りが現在も変わらず行われている。

(4) 大阪の夏祭りの現況と今後の研究課題

大阪の夏祭りカレンダーの作成後、現地調査を行ったが、祭りの日程が重なっているものもあるため、この中から大阪市内を中心にして、できるだけ特徴のある儀礼や行事がともなうものを選んだ。大阪の夏祭りは、多種多様な催しが行われており、中には古くからの行事が中断していたのを、町おこしもかねて新たに復活・再生したものもある。それらの調査結果については、調査を行った大学院生たちの報告を載せたので、そちらを参照していただき、ここでは主な特色をまとめておきたい。

これまで述べてきたように、夏祭りには疫病などの災厄を祓う要素が強い。天神祭も大坂の町の災厄を大川(旧淀川)の下流から海の彼方へ放逐する祭りである。また、旧暦6月晦日で夏が終わり、季節は秋に変わるため、一年の半ばが過ぎて、夏を越えたということで、夏越の祓えが行われる。この時、茅の輪をくぐって災厄を祓う茅の輪くぐりの儀礼が

住吉祭など、各地で行われている。

夏祭りは都市の祭礼であり、とりわけ大阪市内の祭りはその印象が強い。しかし、大阪府下に目を向けると、農村の祭りの要素も残っている。東大阪市の石切^{つるぎや}剣箭神社の献牛祭は、牛の頭の作り物が行列に出てくるものである。現在の祭りの行列は1985年（昭和60）に復活されたものだが、暦の上では、夏至から11日目を半夏生（はげっしょう、はんげしょう）と呼ぶ。新暦では7月2日ごろに当り、この日の前日までに田植えを終わらなければいけないという民俗が残っている。かつては、田植えや稲刈りなどの農作業を、近所の家と共同で順番を決めて行っていたため、この前日までにそれを終わらせ、半夏生の日には休むのだという。そのため牛なども慰労のために休ませるという意味合いもあって、牛の祭りが行われたのであろう。

7月7日の七夕は本来秋の行事で、旧暦を1か月ずらした8月ならば、梅雨の時期を避けられるのだが、現在も新暦7月のまま行われている。また旧暦6月7日は、修験道の開祖の役行者（役小角）の命日だとされており、この日に各地で修験道関連の祭りが行われる。奈良県吉野山蔵王堂の蛙跳びの儀礼が行われるのもこの日であるが、大阪府下でも箕面市の瀧安寺や金剛山で大護摩を焚く儀礼が行われている。

仏教行事としては、8月の旧盆に集中し、7月は愛染祭など数えるほどしか見当たらない。しかし、江戸時代までは、神仏習合が普通であった。住吉大社や大阪天満宮などにも神宮寺があったが、明治初年の神仏分離令と呼ばれる一連の布告によって、寺院から神社関連のものが排除され、それにとまって廃仏毀釈が起こった。これによって、神仏習合がなくなり、神宮寺が破壊された。

現在目にする神社の祭りは、いずれも明治以降の姿であるが、かつての名残が大阪市平野区の杭全神社に残っている。この神社の夏祭りは地車が有名であるが、それとは別に神輿の渡御がある。その御旅所からの帰途に、全興寺と長宝寺に立ち寄り、住職から神輿に供物が捧げられ、巫女の神楽が奉納される。これは、京都の東寺に稲荷社の神輿が立ち寄って、僧侶が供物を捧げて般若心経を読み上げると同じであり、神仏習合の儀礼が大阪にも残っていることは興味深い。

また、杭全神社の夏祭りもそうであるが、大阪の祭りというと地車の印象が強い。天神祭でも、江戸時代には100基以上の地車が出ていた記録がある。特に泉州や南河内の地域では、地車が競って曳き回される。しかし、9月の岸和田のだんじりをはじめとして、秋祭りの方が盛んで、それに比べると、夏祭りの方にも地車が出されるところは少ない。また、本来は秋祭りだけだったのが、夏祭りにも出すようになったところもある。

このように大阪では、府下の各地で夏祭りが盛んに行われている。しかも、その内容は大阪市内を中心とする都市の祭りの要素だけではなく、農村部の祭りや修験道、仏教的色彩も残っているなど、非常に多彩な要素が含まれている。秋祭りが日曜日に変更されるところが多いのに対して、夏祭りは平日に当たっても昔通りの日程で行われており、祭りを支える層の厚さとその結束の強さがうかがえる。

今後の研究課題としては、祭りを研究する上で、明治以降大きな変動が3回あったことを考慮しなければならない。最初の変動は、すでに述べた廃仏毀釈である。次の変動は、1906年（明治39）の第一次西園寺公望内閣の神社合祀政策による神社の統廃合である。これは南方熊楠の反対運動で知られるものだが、これによって大阪府下の神社は合祀され、その数が非常に減少した。そして第二次世界大戦後の農地改革で、神田などの共有財産がなくなり、祭りを支える宮座などの運営がなりたたなくなってしまう。現在の祭りの調査とともに、これら歴史的な変遷もとらえなければならない。

《参考文献》

- 船越政一郎編『浪速叢書』（浪速叢書刊行會、1926～1930年）。
柳田国男著『日本の祭』（1942年、『柳田国男全集 13』ちくま文庫版、1990年）、『祭日考』（1946年、『柳田国男全集 14』ちくま文庫版、1990年）。
『大阪春秋』7号（特集・大阪の祭り、1975年）、22号（特集・大阪の年中行事、1979年）、42号（特集・大阪の歳時記、1985年）。
大阪府神道青年会編『大阪の祭り』（大阪府神道青年会、1980年）。
高橋秀雄、森成元編『祭礼行事・都道府県別 大阪府』（おうふう、1993年）。
旅行ペンクラブ編『大阪の祭』（東方出版、2005年）。

大阪の夏祭り調査報告

1. 愛染まつり 勝鬘院愛染堂
2. 献牛祭 石切劔箭神社
3. 採燈大護摩供 瀧安寺
4. 蓮華祭 転法輪寺・葛木神社
5. 七夕祭 安倍晴明神社
6. 七夕祭 機物神社
7. 七夕祭 小松神社（星田妙見宮）
8. いくたま夏祭 生國魂神社
9. 平野郷の夏祭り 杭全神社
10. 夏祭 玉造稻荷神社
11. 高津宮夏祭り 高津宮
12. 東高津宮夏祭り 東高津宮
13. 夏季大祭 坐摩神社
大阪せともの祭り 陶器神社
14. 氷室祭 難波神社
15. 天神祭 大阪天満宮
16. だいがく祭 生根神社
17. 住吉祭 住吉大社

1. 愛染まつり 勝鬘院愛染堂

（大阪市天王寺区夕陽丘町）

四天王寺別院勝鬘院・西国愛染霊場第一番札所

本尊・由緒：金堂（愛染堂）に愛染明王像、多宝塔には大日如来像が祀られる。普段は秘仏であり、両像ともに愛染まつりの期間（愛染明王は1月の修正会の期間にも）に、特別に開帳される。

593年（推古元）聖徳太子が四天王寺を創建した際に、施薬院として開かれたのが始まりであり、その後、太子がここで勝鬘経を講じたことから勝鬘院と称されるようになったと伝えられる。愛染明王は、愛敬・人気・縁結びの本尊として有名であり、親しみをこめて「愛染さん」と呼ばれている。

祭日：6月30日（宵祭）、7月1日（本祭）、7月2日（後祭）

祭りの特色：大阪で行われる最初の夏祭り。また、関西で一番早く浴衣を着る祭りとして「浴衣祭」とも呼ばれ、人びとに親しまれている。

祭りの現況：6月30日14時ごろ、強い日差しの中、紅白の布と、愛染かつらの花の造花で飾った色鮮やかな宝恵駕籠行列が、大阪市阿倍野区の近鉄百貨店

阿倍野店前を出発する。駕籠6台には浴衣姿の愛染娘12人が乗り込み、法被姿の担ぎ手の「愛染さんじゃ、宝恵駕籠（ほお・えっ・かあ〜・ごっ）」「べっぴんさんじゃ、ほお・えっ・かあ〜・ごっ」「商売繁盛、ほお・えっ・かあ〜・ごっ」の掛け声と鉦や太鼓を打ち鳴らしながら、愛染堂まで約1時間、谷町筋を北へ練り歩く。

愛染まつりでもっとも有名な宝恵駕籠行列の名前の由来は、江戸時代の年号・宝永からきたもので、この宝永年間（1704～11）に芸妓衆が駕籠に乗って、恋愛成就・商売繁盛の祈願のために愛染堂にお参りに来ていたのを再現したものである。以前は駕籠の数も10台をこえ、実際に芸妓衆が乗っていたが、1998年（平成10）から一般公募を始め、その中から愛染娘を選出する形式となった。

15時30分ごろ、一行は境内へ到着し、本堂の前に進む。そこでお披露目と称して、掛け声とともに次々と愛染娘をのせた駕籠が担ぎ手たちによって高く担ぎ上げられ、3～4周ずつ、ぐるぐると回される。これが駕籠上げである。しかし地元の方の話によると、駕籠を回すようになったのはごく最近からのことで、報道陣やカメラマンへのサービスだという。しかし景気付け、という意味ではとても活気が感じられた。

17時から、多宝塔で大法要が行われる。四天王寺管長以下20名以上の僧侶たちが愛染堂を参拝した後には多宝塔へ進み、声明に散華の儀式を織り交ぜながら人びとの健康と心願成就を祈願する。この法要には、愛染娘たちも参列している。この大法要は、夏の暑さに負けないよう、疫病などにかからないようにとの思いで行われていた6月30日の夏越の祓えの風習を今に伝えるものだと伝えられている。

また、祭りの期間中は、毎日18時から芸能大会や祭り囃子などが演じられる。

愛染まつりには古くからの言い伝えがある。それは「愛染パラパラ」と言われるもので、なぜか毎年、祭りの期間の6月30日から7月2日の間は天気が悪く、「愛染まつりの期間中に一度は小雨が降る」というものである。愛染まつりに毎年来られている方のお話では、記憶にある限りその言い伝えは正しい、とのことで、地元では周知のこととなっている。今年もまた、調査に行った6月30日は晴天に恵まれていたが、7月2日の大阪は、雨が降り注いで

2005年 大阪の夏祭りカレンダー

月	火	水	木
6/27	6/28	6/29	6/30 ○勝鬘院愛染堂・愛染祭(天王寺区) 宝恵駕籠行列 ○茨木神社 大祓・輪くぐり神事(茨木市)
7/4	7/5	7/6 ○機物神社・七夕祭(交野市)	7/7 ○機物神社・七夕祭 七夕飾・茅の輪くぐり ○龍安寺・採燈大護摩供(箕面市)開山忌 護摩壇 ○葛木神社・転法輪寺・金剛山蓮華祭(御所市・千早赤阪村) 護摩壇 ○小松神社(星田妙見宮・交野市)七夕飾 ○安倍晴明神社・七夕祭(阿倍野区) ○大阪天満宮・星愛七夕祭(北区)
7/11 ○杭全神社・夏祭(平野区) 足洗神輿川行事 ○生國魂神社・いくたま夏祭(天王寺区) 枕太鼓・獅子舞	7/12 ○杭全神社・夏祭 地車合同曳行 ○生國魂神社・いくたま夏祭 渡御祭 ○難波八坂神社・夏祭(浪速区) ○白鳥神社・夏祭(羽曳野市)	7/13 ○杭全神社・夏祭 地車宮入り ○難波八坂神社・夏祭(中央区) ○堀越神社・夏祭(天王寺区) ○五社神社・例祭(池田市) ○細河神社・例祭(池田市)	7/14 ○杭全神社・夏祭 神輿渡御 ○難波八坂神社・夏祭 ○茨木神社・夏祭(茨木市) 枕太鼓 ○玉祖神社・夏祭(八尾市)
7/18 ○瓢箪山稲荷神社・夏祭 ○高津宮・夏祭(氷室祭) ございばの神饌・張り子の虎 ○河堀稲生神社・夏季大祭(天王寺区) ○呉服神社・例祭(池田市) ○住吉大社・住吉祭 神輿洗行事(第3月曜・住ノ江区・大阪南港)	7/19 ○東高津宮・夏祭(天王寺区) ○野田恵比須神社・夏祭(福島区) ○河堀稲生神社・夏季大祭	7/20	7/21 ○坐摩神社・夏祭(中央区) せともの祭り(~24日) ○難波神社・氷室祭(中央区) ○三光神社・神祭(天王寺区) ○寺方の提灯踊り(守口市)
7/25 ○大阪天満宮・天神祭 陸渡御・船渡御 ○生根神社・だいがく祭 だいがく昇き ○紀部神宮・例祭(池田市) ○佐太天満宮・夏祭(守口市) ○洪川神社・逆祭(八尾市) ○道明寺天満宮・天神祭	7/26 ○洪川神社・逆祭	7/27 ○洪川神社・逆祭 ○安倍晴明神社・夏祭(阿倍野区)	7/28 ○興覚寺・ほうろく灸祈祷(土用丑日・堺市) ○安倍晴明神社・夏祭
8/1 ○住吉大社・住吉祭 神輿渡御祭 ○住吉大社宿院頓宮 荒和大祓神事(堺市) ○恩智神社・恩智祭り(八尾市) 布団太鼓 ○一岡神社・祇園祭(泉南市)	8/2	8/3	8/4

金	土	日
7/1 ○愛染祭	7/2 ○愛染祭 ○石切劔箭神社・献牛祭 (東大阪市)	7/3
7/8 ○大津神社・夏越祭 (羽曳野市)	7/9 ○大森神社・灯笼祭 (第2土曜・熊取町)	7/10
7/15 ○玉造稻荷神社・夏祭(中央区) 玉造黒門白瓜のふるまい ○大江神社・夏祭(天王寺区) ○久保神社・夏祭(天王寺区) ○五條宮・夏祭(天王寺区) ○お初天神(露天神社)・夏祭(北区) 地車囃子 ○茨木神社・夏祭 ○玉祖神社・夏祭 ○八坂神社・例祭(池田市)	7/16 ○玉造稻荷神社・夏祭 ○感田神社・太鼓台祭 (貝塚市) 太鼓台 ○日根神社・ゆ祭 (泉佐野市) 五社音頭 ○大江神社・夏祭 ○久保神社・夏祭 ○五條宮・夏祭 ○お初天神(露天神社)・夏祭 ○門真神社・例祭(門真市)	7/17 ○感田神社・夏祭(第3日曜 ごろ) ○瓢箪山稻荷神社・夏祭 (東大阪市) ○高津宮・夏祭(中央区) ○日根神社・ゆ祭 ○春日神社・夏祭 (泉佐野市) ○伊居太神社・例祭 (池田市)
7/22 ○坐摩神社夏祭 ○難波神社氷室祭 氷柱の奉納 ○三光神社神祭 ○能勢妙見山・虫弘会祈禱会 (能勢町) ○寺方の提灯踊り	7/23 ○陶器神社・陶器祭(中央区) 陶器人形 ○科長神社・夏祭(太子町) ○星田妙見宮・妙見祭 (交野市)	7/24 ○大阪天満宮・天神祭(北区) 銚流し神事・茅の輪くぐり ○生根神社・だいがく祭 (西成区) だいがく ○科長神社・夏祭(第4日曜) 船形だんじり・三番叟・八 社太鼓 ○佐太天満宮・夏祭(守口市) ○道明寺天満宮・天神祭 (藤井寺市)
7/29	7/30 ○住吉大社・住吉祭 (住吉区)	7/31 ○住吉大社・住吉祭夏越祓神 事・茅の輪くぐり ○道陸神社大祓祭(貝塚市) ○堺大魚夜市(堺市)
8/5	8/6	8/7

いた。まさに「愛染パラパラ」である。

(6月30日調査：福島たえ・森本安紀・和住香織)



《参考文献》

長谷川幸延著「大阪歳時記」読売新聞社、1971年。「愛染まつりパンフレット」勝鬘院。

2. 献牛祭 石切^{つるぎや}劔箭神社

(東大阪市東石切町)

祭神：饒速日尊^{にぎはやひのみこと}、可美真手命^{うまし までのみこと}

祭日：7月2日 献牛祭 10時～

祭りの特色：発泡スチロールで作られた5色の作り物の牛のパレードが特徴。石切劔箭神社から東へ、参道商店街を登り、近鉄奈良線石切駅付近を通って生駒山中腹の上之社（奥の院）までパレードを行う。ただし、2005年は大雨のためパレードは中止された。

祭りの由緒：毎年夏至から11日目は半夏生（はんげしょう・はげっしょう）で、この日までに田植えを終わって休む日だといわれており、大阪府の河内地方ではハゲダコといって蛸を食べる民俗も残っている。その日が7月2日ごろに当たるため、もともとは田植えで働いた牛の労をねぎらう意味合いがあったものと考えられる。神社のパンフレットによると、好物の酒やご馳走をふるまったあと、紅白の幣

帛や錦絵、鈴などで牛を飾り神社に参拝して、五穀豊穡・家内安全を祈願することが、昭和初期まで行われていたという。

その後、1985年（昭和60）年の丑年に参道商店街が中心になって家内安全、商売繁盛を祈願する行事として復活させ、当初は枚方市津田の牧場から本物の牛を借りていた。しかし、人の多さに驚いて暴れ出し、角を折るなどしたため、現在のような作り物に落ち着いた。

(7月2日調査：城下奈美・中居惣子)



《参考文献》

田野 登「『梅田牛駆け粽』考—都市生活者から見た農村行事—」(『日本民俗学』211号、1997年)。「石切劔箭神社パンフレット」。

3. 採燈大護摩供 瀧安寺

(箕面市箕面公園)

宗派：聖護院門跡 本山派

本尊など：本堂（弁天堂）本尊・弁財天 脇尊・毘沙門天・大黒天
行者堂（開山堂） 主尊・役ノ行者 脇尊・不動明王・蔵王権現

祭日：7月7日（採燈大護摩供養）

行事の特色：山伏姿の行者たちが法螺貝を吹き、護摩を焚いて無病息災や五穀豊穡を祈る行事。白煙と炎が立ち昇る護摩の儀礼が中心だが、その前に行われる諸作法も興味深い。特に、旅の行者に対して「修験道の意味」や「身に着けた法衣・法具の意味」を問う“山伏問答”、矢を放って結界を張る“法弓の儀”が特色である。

行事の現況：

- ①法要(本堂)…本尊の弁財天や不動明王に参拝し、般若心経を唱える。
- ②山伏問答…旅の行者に聖護院門跡かどうかを問うために行う問答。「修験道とは?」「修験道の開祖は?」「身に着けた袈裟の意味」などを質問し、行者が答える。
- ③法弓の儀…東・西・南・北・中央・鬼門(東北)の六方向に高く矢を放ち、結界を張る作法。
- ④法剣の作法…護摩壇に向かって剣を振り、清める作法。
- ⑤斧の作法…山の神に対して行われる作法。
- ⑥護摩の儀礼

行事の由緒など：旧暦6月7日は開祖の役行者(役小角)の命日だと伝えられ、この法要もかつてはその日に行われていたが、現在では新暦7月7日になっている。瀧安寺では、毎月7日(4月は15日、6月は1日)に護摩供が行われているが、特に毎年4月・7月・11月の大護摩法要には、全国各地から山伏姿の行者たちが参加する。しかしこの法要は、約15年前までは7月7日だけで、しかも朝・昼・晩の3回行っていたというが、現在は11時からの1回だけになっている。護摩壇を覆う桧葉は、大阪府豊能町高山という集落が昔から奉納することになっている。その代わりに、高山の代表者は護摩壇の灰を持ち帰り、それを集落の人に分けるという。

(7月7日調査：城下奈美・野口翔)



4. 蓮華祭 転法輪寺・葛木神社

(奈良県御所市高天)

転法輪寺：真言宗醍醐派、御本尊・法起大菩薩、^{ほうき}副本尊・役行者(神変大菩薩)

葛木神社：主祭神・葛木一言主大神、副祭神・大楠公

祭日：6月7日(転法輪寺住職の大峰山入峰)

7月7日(旧暦6月7日、葛城山に入峰し蓮華祭を行う)

行事の由緒：旧暦6月7日は、1300年余り前に金剛山に籠もって山岳宗教を開いたとされる役行者の命日だと伝えられ、成仏し、蓮華の座に着いたと伝えられることから蓮華祭として命日に厳修するようになったのが始まりだとされている。以前は、蓮華法会または蓮華会式とよばれていた。神仏混淆の祭りであり、2005年で59回目になる。金剛山は、奈良時代以来、修験道七高山のひとつに数えられていたが、明治初年の神仏分離によって葛木神社を残してすべて廃寺になったため、葛城山伏も大峰山に吸収された。しかし、1950年(昭和25)に寺院が再興され、現在に至っている。

行事の現況：11時から葛木神社で、例祭を行う。列席者は千早赤阪村の村長など、葛木神社に縁のある人びとである。当山派修験・総本山の醍醐寺三宝院門跡以下、山伏たちが入山し、12時から、転法輪寺から葛木神社へ法螺貝を鳴らしながら、列をつくって進む。葛木神社では法螺貝を鳴らして法楽をささげ、般若心経を唱える。その後、転法輪寺に戻って、役行者堂でも同様に、法楽などをささげる。本堂でも、蓮華を供えて同様の儀礼を行った後、転法輪寺道場で三宝院門跡が大法弓の儀と柴灯大護摩供



養を行う。最初に赤い衣の醍醐寺の住職が護摩供養を行い、次に紫の衣の転法輪寺住職が行う。護摩壇には桧葉がかけられ、火が付けられる。護摩供養の後、護摩壇の組木を使って、火渡りの儀が行われる。

(7月7日調査：森本安紀・福島たえ)

《参考文献》

『千早赤阪村誌』千早赤阪村役場、1980年。葛城貢『史跡金剛山』金剛山葛木神社、1994年。

5. 七夕祭 安倍晴明神社

(大阪市阿倍野区阿倍野元町)

阿倍王子神社の飛地境内社

祭神：安倍晴明公

祭日：7月7日

祭りの特色：境内に、美しく飾り付けた七夕笹と薬玉飾りを並べて、お祭りの雰囲気演出する。七夕祭は、阿倍王子神社で七夕祭が行われているので、境内社である安倍晴明神社でも同じように行う。

祭りの由緒など：七夕祭は、乞巧奠きっこうでんとも呼ばれ、手芸の上達を祈る行事だが、安倍晴明神社では天文博士安倍晴明公に、手芸や文芸の上達をお祈りした後、神前で献歌と献句を行う。

(7月7日調査：中居惣子・川北紗英子・和住香織)

6. 七夕祭 はたもの機物神社

(交野市倉治)

祭神：あまのたなばたひめ天棚機比売大神、たかはたちぢひめ栲機千々比売大神、ことしろぬし地代主大神、やえことしろぬし八重事代主大神

祭日：7月6日(宵宮)、7日(本宮)

祭りの特色：それぞれ家庭で笹に短冊を付けてきたのを持ち寄って境内に飾ってもらうため、境内は七夕の笹で埋めつくされる。境内で短冊も販売しており、その場で笹に付けて飾ることもできる。拝殿の前の鳥居には茅の輪が取り付けられており、参拝者は茅の輪をくぐって拝殿に参拝する。7日の本宮では16時ごろから御神輿が出る。19時からの神事では、短冊のお祓いと祈願も行われ、夜中に竹を近くの天の川に流す。

祭りの由緒：『交野市史』によると、もともとはこ

の地に初めてはたおり機織の技術を伝えた漢人あやひとのしょういん庄員を祭神としていたが、平安時代になると、朝廷の人びとが遊獵のために交野地方を訪れ、当時盛んだった天体崇拜思想や文学的趣味から、その祭神が織女星、すなわち棚機姫となって現在にまで続いているという。一方、陰陽道の影響が祭神をたなばた神としたとする見方もある。また、付近の地名として残る天田の宮や天の川の名も、この当時に生まれたとされている。現在の七夕祭は、1979年(昭和54)に復活したものである。

(7月7日調査：中居惣子・和住香織)



《参考文献》

交野市史編纂委員会編『交野市史・民俗編』交野市、1981年。

7. 七夕祭 小松神社(星田妙見宮)

(交野市星田)

星田神社境外社

祭神：〔本座〕天之御中主大神、高皇産霊大神、神皇産霊大神(北辰妙見大菩薩)

祭日：7月7日

祭りの特色：妙見山の産所付近に境内が七夕の飾りで彩られ、茅の輪も境内を少し入ったところに設けられている。それをくぐると正面に注連が張られた四角い場所があり、そこで湯立神楽が奉納される。

祭りの現況：祭りの準備は前日から行われ、星田神社の神社総代が協力して行う。当日は、11時から七夕祭りの祭典や巫女の神楽や「剣の舞」の奉納、15時から境内にある登龍の滝の前で大護摩供養が行わ

れ、18時から湯立神楽の奉納や妙見星太鼓の奉納、最後に21時ごろから七夕飾りを広場でお焚き上げし、祭りが終わる。

祭りの由緒など：境内に磐座があり、星田妙見宮（星田小松神社）の御神体が織女石だという伝説もある。交野市内には天の川や星田、星ヶ丘、中宮など、七夕に関する地名や伝説があちこちに残っており、天から七曜の星（北斗七星）が3つに分かれて降ってきて、そのひとつが落ちた場所が妙見宮だと伝えられている。星田でも竹の小枝に願い事を書いた短冊をつけ、色紙を添えて7日の夕方に家の軒先に出し、翌日（8日）朝早くから天の川に流していた。神社では、2月8日の星祭り、7月7日の七夕祭、7月23日の星降り祭をあわせて三大星祭と称している。

（7月7日調査：中居惣子・和住香織）



で、大きく3つに分かれている。夏祭りには、現在は合併して中央区になっている旧東区の地区が枕太鼓、旧南区の地区が獅子舞を出し、天王寺区の一部を占める氏子区域からは神輿を出すことになっている。

11日には、枕太鼓・獅子舞・神輿が行宮（大手門）から出発して、それぞれの氏子区域を巡行して生國魂神社に宮入りする。明治に入って、神社の格式にあわせて祭りも盛大なものにするため、このような形になったという。また、宮入り後、神輿を曳いて巡行に参加した子供たちの額や両頬に神社の御朱印が押される。

12日は、枕太鼓を先頭に、神官・役員・御羽車^{おほぐるま}などが自動車で、大手門の行宮、本町橋の御旅所など氏子区域を巡行し、氏子の疫病退散・厄除け開運を祈る。行宮からの渡行先である御旅所は、西道頓堀がはじまりとされており、明治20年代に現在の本町橋に定められた。

巡行の途中、枕太鼓などは、それぞれの氏子区域や、宮入り後に神社の境内に設けられた他の氏子区域の人たちのテント前で、生玉締めと称する手打ちを行う。天神祭の大阪締めが有名だが、生玉締めは「う～ちましょ（チョンチョン）、もひとつせえ（チョンチョン）、祝うて三度（チョンチョンチョン）、めでたいな～（チョンチョン）、本決まりい（チョンチョン）」と5節構えになっている。枕太鼓の奉納は、大坂城からの移築の際が始まりとされており、願人6人が3人ずつ向かい合う形で座り、一番

8. いくたま夏祭 生國魂神社

（大阪市天王寺区生玉町）

別称：生玉神社・いくたまさん

祭神：生島大神、足島大神

祭日：7月11日（宵宮）、12日（本宮・渡御祭）

祭りの特色：氏子区域は大阪市天王寺区から中央区と広く、それぞれの町内から子供神輿・獅子舞・枕太鼓などが出される。12日の渡御祭も、現在では交通事情のため、自動車でのお渡りになっているが、戦前は千数百人の行列だったという。

祭りの経過：元の神社は、大坂城大手門付近にあり、豊臣秀吉の大坂城築城の際に、現在の場所に移されたと伝えられる。そのため夏祭りでは、大手門を行宮として、渡御が行われる。氏子区域は広大



左端の一人が調子を取り、それに合わせて太鼓を打つ。この枕太鼓は生玉から天満宮に教えにいったとの伝承がある。現在は、旧東区の氏子会の下に願人会があり約60名が所属している。11・12日とも20時から豊太閤奉納として、境内でお練りを行う。特に枕太鼓のお練りはその勇壮さから、大勢の見物客が訪れる。

(7月11日調査：森本安紀・和住香織)

9. 平野郷の夏祭り 杭くまた全神社

(大阪市平野区平野宮町)

祭神：素盞鳴尊

祭日：7月11日～14日 夏季例大祭

11日(足洗い神輿川行神事)、12日(地車九町合同曳行・南港通り)、13日(地車宮入り)、14日(お渡り神輿渡御)

祭りの特色：11日の神輿への神遷しうつ、14日の神輿のお渡りが神事を中心だが、12日・13日に平野の九町(流町・野堂町北組・野堂町南組・野堂町東組・馬場町・泥堂町・西脇町・背戸口町・市町)から出す地車の曳行がこの祭りの見せ場である。

祭りの経過：11日は、早朝に一番太鼓が鳴らされ、布団太鼓の巡行がある。14時から神輿の川行神事、足洗ともいい、神輿を樋の尻橋のたもとの祓所まで運び、祓い清めの神事を行う。夕方に神社へ帰った神輿は、拝殿で飾り付けを行す。日没後、神輿に神遷しの神事を行う。

12日から、地車の曳行が始まる。昼間は子どもが、夜は大人が曳く。20時30分ごろから、地下鉄平野駅沿いの南港通りに9台の地車が集まり、九町合同曳行が行われる。神社では各地車の特徴や由緒を載せたパンフレットも配布されており、各町の地車にかける情熱がうかがえる。13日も氏子区域で地車の曳行、19時30分ごろから地車の宮入りがある。

14日の神輿のお渡りでは、布団太鼓が午前中に御旅所の三十歩神社へ出発し、12時ごろから神輿も御旅所に向かう。御旅所からの帰りに、神社とゆかりの深い全興寺、長宝寺に神輿が立ち寄り、寺から神饌が献ぜられ、神楽が奉納される。その後、大念仏寺にも立ち寄るが、これらの儀礼は神仏習合の名残をうかがわせる。21時ごろに神輿が宮入りし、神遷しが行われる。

祭りの由緒など：『平野郷町誌』によると、この祭りが明治初年には、6月6日～14日に行われていたが、いつのころからか7月に変わったという。また同書には夏祭りの各日の様子が記載されているが、“九町合同曳行”などの記載がなく、この本が書かれた1931年(昭和6)から現在までの間に、祭りの内容が変化していることがうかがえる。

(7月12日調査：城下奈美・中居惣子、和住香織)



【参考文献】

三浦周行監修『平野郷町誌』平野郷公益会、1931年。
平野区誌編集委員会編『平野区誌』平野区誌刊行委員会、2005年。

10. 夏祭 玉造稻荷神社

(大阪市中央区玉造)

祭神：宇迦うが之御魂のみたまのおおかみ大神、下照したてるひめのみこと姫命、雅日わかひるめのみこと女命、月つき読よみ命、軻遇かぐつちのみこと突智つち命

祭日：7月15日(宵宮・食味祭)、16日(本宮)

祭りの特色：玉造稻荷神社夏祭りでは、神社境内で栽培された黒門越瓜くろもんしろうりを神饌として供え、また越瓜を使用した料理を振舞う「食味祭」が行われている。

祭りの現況：越瓜の振舞いは、夏祭り宵宮に当たる15日の18時から始められた。当日は500食分の「うりそうめん」が用意され、参拝者に配られた。畑は神社境内の東側にあり、前年の2004年には約300個の越瓜を収穫したそうである。

玉造黒門越瓜について：江戸時代前期、大坂の越瓜は主に西成郡で栽培され、木津村・今宮村が越瓜促成栽培の祖とされた。その後、越瓜栽培は玉造村にも広がり、玉造の黒門付近で良質の越瓜が採れたことから、玉造黒門越瓜と呼ばれるようになった。

黒門越瓜は、江戸時代の狂歌師貞柳（1654～1734年）に「黒門といへども色はあおによし奈良漬にして味をしろうり」と詠まれ、安永6年（1777）刊行の『難波丸綱目』浪花名物寄に「白うり玉つくりくろもん」と記載されているように、江戸時代の大阪名産の一つであった。

その黒門越瓜に再び注目し、地域の郷土意識の再確認と活性化につなげようという取り組みが、2002年から保存会「玉造黒門越瓜出隊」^{たまつくりくろもんしろうりだしたい}によって進められている。保存会は、玉造稻荷神社の神職をはじめ、近隣の方々、伝統野菜の振興に携わっているの方々によって結成され、黒門越瓜の復活・保存・普及活動が行われているが、今回調査した玉造稻荷神社夏祭りにおける食味祭も、その活動の一環である。

（7月15日調査：内海寧子）



《参考文献》

季刊 大阪「食」文化専門誌『浮瀬』第6号、NPO法人浪速魚菜の会事務局、2004年9月。

玉造黒門越瓜ホームページ・玉造黒門越瓜の歴史
<http://www.inarijinja.or.jp/uri/>

11. 高津宮夏祭り 高津宮

（大阪市中央区高津）

祭神：本座・仁徳天皇、左座・応神天皇・仲哀天皇・神功皇后、右座・履中天皇・葦姫皇后

摂末社：比売古曾神社（天正11年〔1583〕豊臣秀吉の大坂城築城の際に、高津宮を比売古曾の社地〔現社地〕に遷したので、比売古曾神社を高津宮の地主神として奉斎することとなった）

祭日：7月17日（宵宮祭）、18日（本宮祭）

祭りの特色：夏祭りは例祭として最も重要な祭儀であり、俗に「氷室祭」と言っており、氷の奉納が行われ、氷柱が本殿の入り口両脇に立てられ、暑気払いとしてかわり氷が無料で参詣者にふるまわれる。また、境内地に植わっている「ごさいば」（アカメガシワ）の葉が神饌として供えられる。だんじりを境内に据え、絵馬殿にてだんじり囃子が奉納される。また、祭りの期間のみ、夏の邪気を祓う獅子頭のついた笹が授与される。

神輿は2か所から出され、黒門市場（近鉄・地下鉄日本橋駅付近）の地区の「黒門神輿」、桃園地区（地下鉄谷町六丁目駅付近）の「鳳神輿」がある。

祭りの経過：17日は、9時から献湯神事、10時から本殿の神楽開始、12時からだんじり囃子開始。

15時から宵宮祭で、黒門神輿と鳳神輿の宮入り。19時から境内の高津の富亭（落語の「高津の富」に由来する）で、高津落語会。22時、神楽終了。

18日は、8時から献湯神事、10時から本宮祭。11時すぎからだんじり囃子の準備、12時から始める予定だったが、参拝者が少ないため、実際に囃子が始まったのは13時ごろからだ。囃子方は、城東区今福から来ており、夏の間は天神祭など様々なところの祭りのでだんじり囃子を奉納するそうである。そのような団体は、大阪市内に70はあるという。竜踊りの踊り手と囃し手は合わせて10人くらいはいたかと思われる。15時ごろから神輿の宮入り、今年は桃園地区の鳳みこしが先に宮入りをした。宮入りをして宮司に御祓いをしてもらったあとは、本殿前、絵馬堂前、高津の富亭前の3か所で「生玉締め」をしていた。

桃園地区は、神輿の保管場所がないので、高津宮北東にある桃園公園内の桃園会館（旧桃園小学校）を御旅所とし、午前中は神社に神輿が飾ってあり、昼ごろに御旅所への渡御が行われて、再び神社へ宮入りが行われる。黒門神輿は、1960年に新調され、黒門市場内に保管されている。普段はシャッターがおりているが、祭りのときには開放される。黒門神輿・黒門子ども神輿の宮入りは実にあっさりしたもので、桃園地区のように「生玉締め」をすることもなく、宮入り後、宮司に御祓いをしてもらう。また、子ども神輿を曳いていた子どもたちには、拝殿前で厄除けとして神職から御朱印を押される。昔は胸の真ん中に一か所だけであったが、現在では顔の

あらゆるところや腕など、子どもたちの要望に応じて押印している。

16時ごろに再び神輿が担がれて神社を出発し、黒門市場へ帰っていく。宮司の話では、鳳神輿は50年ほどの間担ぎ手がないために出すことができず、昨年に再興したという19時から社務所前に建てられた特設舞台で日舞や民踊が奉納された奉納演芸が始まり、22時ごろまで境内は賑わう。

(7月18日調査：和住香織・東秀幸・野口翔)



12. 東高津宮夏祭り 東高津宮

(大阪市天王寺区東高津町)

祭神：仁徳天皇、磐之姫命

神社の由緒ほか：東高津神社は、もとは平野神社と呼ばれ、現在の近鉄上本町駅付近にあった。神社名は、東高津村の名をとったという。

祭日：7月19日（宵宮祭）、20日（本宮祭）

祭りの特色：境内で地車囃子が奉納され、無病息災の福餅撒き神事が行われる。

祭りの現況：19日17時から宵宮祭、無病息災の福餅撒き神事が行われる。境内では、地車囃子が奉納される。20日は、鳥居前に枕神輿、境内には黒い神輿が置かれてあり、献湯神事や夏大祭のあと、子ども神輿・子ども枕太鼓の巡行がある。17時から福餅撒き神事が再び行われ、地車囃子や神楽の奉納があり、21時ごろまで賑わう。

(7月20日調査：和住香織)

13. 夏季大祭 坐摩神社

(大阪府中央区久太郎町4丁目渡辺)

通称：坐摩神社

祭神：生井神・福井神・綱長井神・波比岐神・阿須波神（総称：「坐摩神」）

神社の由緒：諸説あるが、神功皇后が新羅より帰還の折、淀川南岸の大江、田蓑島（現在の天満橋の西方、石町付近）に奉祀されたのが始まりと伝えられている。現在地には、天正10年（1582）、豊臣秀吉の大坂築城に際し替地を命じられ、寛永年間に遷座された（『坐摩神社御由緒略記』）。

祭りの由緒など：神功皇后が難波に到着し、御旅所の境内にある「鎮座石」で休息の際、食物を差し上げたことに由来するといわれている。御旅所は、大阪府中央区石町にある境外末社の豊磐間戸・奇磐間戸神社（行宮）で、坐摩神社の旧社地だと伝えられる。境内に、「神功皇后の鎮座石」といわれる巨石が残る。『摂津志』『摂陽群談』によると、所在地である「石町」の地名はここに由来するという。

祭日：7月21日（宵宮祭）、22日（夏季大祭）

祭りの現況：21日宵宮祭、15時斎行。社殿にて祝詞があげられる。22日夏季大祭、11時斎行。神前に芦葉で包んだ白蒸の供御と醬を奉獻し、御旅所へ神輿が渡御するというのが本来の形であったが、現在、渡御は中止されている。現在は社殿の前に神輿を設置し、祭祀を行う。

大阪せともの祭り 陶器神社

坐摩神社の境内末社

祭神：大陶祇神・迦具突智神

神社の由緒：嘉永年間（1848～54）のころ、愛宕山将軍地蔵が祀られたことに始まり、火除の神として崇敬が篤い。「守護神」として、陶器商人が篤く信仰している。もともとは、旧靱南通1丁目に鎮座していたが、1907年（明治40）、市内電車敷設のため、今の地に移転合祀された。

祭日：7月23日（陶器神社例祭・陶器祭）

祭りの特色：瓢の水で火を防ぐとの故事により、陶製瓢と火の要鎮のお札を笹に結びつけ参詣者に授与し、また、陶磁器の端物を贈呈したのが、祭りの起源だという（『陶器神社由緒書』）。

祭りの現況：例祭の神事は、10時から。例祭の期間にあわせて、「陶器人形」が飾られる。これは、顔・手足は普通の人形で、衣装・背景・大道具・小道具一式を陶器で作ったものである。毎年趣向を凝らしたものが新しく作られていたが、現在は陶器神社社殿前に舞楽の万歳楽の人形1体と、阪神高速道路を越えたところにあるマンションの入り口に歌舞伎の娘道成寺1体の計2体が飾られているだけである。かつては、社殿前3か所と、新町橋から信濃橋にかけての間の数カ所に飾られていた。今のようになったのは、5～6年前からだという話である。

祭りの期間にあわせて坐摩神社境内では、「大阪せともの祭」と称して、せともの市が開催される。

(7月21日調査：川北紗英子・東秀幸・中居惣子)



《参考文献》

『明治大正大阪市史 第1巻<概説篇>』清文堂出版、1933年。『昭和大阪市史 第7巻 文化篇』大阪市役所、1953年。『昭和大阪市史続編 第7巻 文化篇』大阪市役所、1968年。『新修大阪市史 第1巻』大阪市、1988年。『大阪府神社名鑑』大阪府神道青年会、1971年。宮本又次『毎日放送文化双書 8 大阪の風俗』毎日放送、1973年。谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第3巻 摂津・河内・和泉・淡路』白水社、1984年。

14. 氷室祭 難波神社

(大阪市中央区博労町4丁目)

祭神：仁徳天皇、素盞鳴尊、倉稲魂尊

祭日：7月21日(宵宮祭)、22日(氷室の神事)

祭りの特色：御祭神に氷をお供えする神事が行われる。また、この両日には、参拝者にかちわり氷がふ

るまわれ、氷を食べると夏バテをせずに、夏を健康に過ごせるといわれている。1973年(昭和48)までは、大阪市西区南堀江1丁目の御旅所への神輿渡御式が行われていた。22日夜には和太鼓の奉納演奏がある。

祭りの由緒など：仁徳天皇の御代に天皇の御兄、額田大中彦皇子が、ある夏、狩の途中、野原に氷を貯蔵する氷室を発見し、その氷を天皇に差し上げたところ、大変お慶びになったという故事による(『難波神社案内記』)。

(7月21日調査：中居惣子・川北紗英子)



15. 天神祭 大阪天満宮

(大阪市北区天神橋2丁目)

祭神：菅原道真公

祭日：7月24日(鉦流神事・宵宮祭・自動車渡御・催太鼓・獅子舞氏地巡行)、25日(夏大祭・神霊移御・陸渡御・船渡御・奉納花火)

祭りの特色：天神祭は日本三大祭の一つとされ、天満宮御鎮座の翌々年、951年(天暦5)に社頭の浜から神鉦を大川(旧淀川)に流し、その流れ着いた浜に祭場を設け御神霊を移し、禊ぎ祓いを行ったのが天神祭の始まりであり、この時、神領民や崇敬者が船を仕立てて奉迎する船渡御も始まったと伝えられている。その後、神鉦の流れ着いた場所を御旅所として船渡御が行われたのだが、のちに御旅所は固定されていった。鉦流し神事は一時中断していたが、1930年(昭和5)に復興された。船渡御も戦争などで何度か中断し、第二次世界大戦後の1949年(昭和24)に復興された。そして、1953年(昭和27)からは、地盤沈下の影響で、大川を遡って桜の宮へ

向かう現在の形になった。

祭りの現況：天神祭の初日である7月24日は、朝7時45分から天満宮本殿において宵宮祭が執り行われ、人びとの無病息災と、続いて行われる鉾流神事の無事が祈られた。そして神事を終えた8時半過ぎに、高張提灯、先払金棒を先頭に、白木の神鉾を手にした神童や供奉人たちの行列が天満宮を出発し、旧若松町浜の祭場（中之島の鉾流橋北詰）へと向かった。これは略式渡御列と呼ばれ、陸渡御と違ってとても静かな行列である。

8時50分に行列は祭場に到着し、鉾流神事が行われた。これは流した鉾が漂着した所に神霊を移し、そこを御旅所とするという古くからの神事を伝え、再現したものである。今年は特に鉾流神事の祭場の改修が行われ、昨年までコンクリート堤防によって遮られていた川への視界が開かれたことで、祭場からも川面を望むことができるようになった。

この鉾流神事の最大の見せ場は、大川に漕ぎ出した斎船の上から神童が鉾を流すところであり、今年は鉾を流す際に奏されていた「鉾流歌」が復活された。これは戦後ずっと廃絶されていたが、2002年（平成14）に「鉾流歌」の楽譜が発見されたことを受けて復曲され、今年の祭場の改修に合わせて再び奏された。「鉾流歌」が鳴り響く中、斎船は川の中央へと漕ぎ出し、神童の手によって神鉾と人形を入れた藁苞が流され、天神祭の無事と安全が祈願された。

その後11時から自動車渡御、16時から催太鼓・獅子舞などの巡行が行われ、祭りは一層活気付いていた。そして、19時からは天満宮境内で地車囃子・天神祭囃子が催され、また龍踊りなどが披露される。

25日は、14時から夏大祭が行われ、神霊が御鳳輦に移される。16時から陸渡御が行われ、船渡御の乗船場がある天神橋の北側までの約4キロを催し太鼓、山車、御鳳輦、玉神輿と鳳神輿などの行列が向かう。18時ごろから御鳳輦が奉安船に遷されて船渡御が行われる。お供をする催太鼓船や地車囃子船などの講社の供奉船、協賛団体や市民船などの神霊をお迎えする奉拝船、どんどこ船や御迎人形船など祭りを盛り上げるため自由に航行できる列外船が大川を遡上する。渡御の渡中に、御鳳輦船では水上祭が行われ、舞台船や供奉船から神楽や囃子が奉納され

る。また、花火講によって奉納花火が打ち上げられる。

22時前に御鳳輦の宮入りがあり、催太鼓が境内に入って大阪締めを行う。その後、本殿で還御祭が行われて祭りが終わる。

また今年天神祭では、参拝者の目を楽しませる見世物があった。それは、日常的な品物を生かして、種々の人物や動物などを造って祭礼などに飾る造り物の展示で、今年のかんぴょうや昆布などの乾物で作った人形「猩々舞」が展示された。作り物は、江戸時代初期の大坂で盛んに作られ、その品物の風合いを全く別のものに見立てて、その趣向や技術を競い合うところに面白さがあるとされていた。この作り物の制作は1926年（大正15）を最後に途絶えていたが、2002年（平成14）に天満宮のボランティア集団の天満天神御伽衆が、蜷の貝殻を藤の花に見立てた「藤棚」を再現し、その後は毎年作っている。今年はそれに加えて、第二弾として人形作りに取り組んだ。猩々は中国の伝説上の動物で、人形は高さ2メートル。上着と袴を昆布で作し、帯の飾りには高野豆腐やしいたけを使用、赤い髪の毛は食紅で染めたかんぴょうであった。製作に約80時間を要した今回の作り物は、蜷の藤棚、大阪府指定有形民俗文化財の天神祭御迎船人形の展示とともに、参詣者の関心を集めていた。

（7月24日調査：福島たえ・城下奈美・森本安紀・内田吉哉・内海寧子）



【参考文献】

井野辺潔編著『天神祭一なにわの響き』創元社、1994年。
大阪天満宮社報『てんまてんじん』第48号、2005年。「天神祭 2005年パンフレット」大阪天満宮。

16. だいがく祭 ^{いくね} 生根神社

(大阪市西成区玉出西)

祭神：蛭子命、少彦名命、菅原道真公

祭日：7月24日（宵宮）、25日（本祭）

祭りの特色：24日に神社の境内に、だいがくを立てる。だいがくの先端にはダシとして神楽鈴を付け、その下に上から順に藁を束ねたもの、榊と御幣、ホコとして緋布地に巴の紋が付けてあり、御神燈が78個吊るされる。これは六十余州をあらわし、もと66個であった。さらに、近くの公園では、中だいがく・子供だいがくが立てられる。だいがくは臺楽・臺額・臺舁とも記し、元は玉出に6基、難波に6基、木津に6基あったと伝えられるが、時代とともに盛衰があり、江戸時代末期には14基にもものぼったが、明治初期には6基になり、太平洋戦争の空襲で失われて現存するのはこの生根神社の1基だけとなっている（大阪府指定有形民俗文化財）。現在では、電線に妨げられるため、この残っているだいがくの巡行は行われていない。

祭りの現況：氏子区域は、岸里・千本・玉出で、24日の宵宮には、枕太鼓巡行や獅子舞が町内を廻る。他に、だいがく音頭や中だいがく舁き披露が行われる。25日の夏祭例大祭には、渡御式、子供だいがく・中だいがく舁きが、だいがく音頭とともに行われる。



祭りの由緒など：清和天皇の御代に、難波一帯が早魃に見舞われたため、農民たちが、日本六十余州の一の宮の御神燈と鈴とがついた二十八間の櫓をたて、竜神に雨乞い祈願を行ったことがはじまりとされている。

(7月24日調査：森本安紀・城下奈美・福島たえ)

《参考文献》

折口信夫「だいがくの研究」(1918年、のち『古代研究・民俗学篇1』収録、1929年、『折口信夫全集』第2巻、中央公論新社)。

『玉出のだいがく 生根神社「だいがく祭り」調査報告書』生根神社、2003年。

17. 住吉祭 住吉大社

(大阪市住吉区住吉)

祭神：住吉大神(底筒男命・中筒男命・表筒男命)、神功皇后(息長足姫命)

祭日：7月30日～8月1日

7月第3月曜日〔海の日〕(神輿洗神事)、

7月30日(宵宮祭)、7月31日(夏越祓神事・例大祭)、8月1日(神輿渡御祭)

祭りの特色：伊弉諾神が黄泉の国で受けた罪穢れを祓うため、筑紫の日向の橘の小戸で禊ぎ祓いをしたときに出現したのが住吉大社の祭神の三神だとされていることから(『古事記』『日本書紀』)、住吉大社はお祓いの神であり、住吉大社夏祭は別名「おほらい」と呼ばれるように、国中のお祓いをする祭りである。

祭りの現況：7月第3月曜日(海の日)は、潮を汲んで神輿を洗う神輿洗神事が大阪南港ATCで行われる。帰りは、住吉公園の高燈籠の御旅所で1泊し、公園内の汐掛道を通って神社に戻る。

7月31日は、夏越祓神事と例大祭が行われる。大阪府指定民俗文化財(記録選択)に指定されている夏越祓神事は、17時ごろから行われる。この神事を中心となる儀礼は茅の輪くぐりである。茅草には強い霊力があり、これで身を祓うことによって、今まで身体に付着していた罪や穢れを除くとされている。16時45分、五月殿前には華麗に着飾った夏越女、楽人、稚児、金棒などとともに一般参拝者が並び、神職によって大祓の詞が奏上される。そして、御祓いを受けた夏越女たちは、列をつくって次々と



茅の輪を3回くぐり、例大祭を行う第一本宮へと向かう。この茅の輪をくぐる際には「住吉の夏越の祓する人は千年のよはひのぶといふなり」という和歌を口ずさむとされている。その後、第一本宮で例大祭の神事が行われ、巫女の熊野舞や住吉踊りが披露される。その後、一般参拝者もこの茅の輪をくぐるが、この茅の輪は、住吉祭が終わる8月1日の夜まで本殿正面の四角柱の住吉鳥居に取り付けられ、参拝者がくぐることができる。

8月1日は、10時から翌日祭・朔日祭が、14時30分から神輿発輿祭が第一本宮で行われ、その後神輿が堺市の宿院頓宮へ出発する。かつての渡御行列は、『住吉名勝図会』などに、騎馬の神職や稚児な



どが神輿に付き従った華やかな様子が描かれている。しかし、神輿の渡御は、交通事情と担ぎ手不足の問題で、1960年（昭和35）から神輿などをトラックに載せた車列の渡御に変更され、1989年（平成元）からは、船型の山車に神輿を乗せて、子供たちが曳くように変わった。しかし、今年は神輿担ぎが45年ぶりに復活し、従来の船型の山車が出発した後、神輿が本殿前から境内の太鼓橋を渡って宿院へ向かった。急勾配の橋のため、渡り終えるのにかなり手間取っていた。

神輿が大和川の橋に到着すると、神輿受渡式が行われ、約3時間ほどで宿院頓宮に到着する。到着後に頓宮祭、引き続いて頓宮前の飯匙堀で荒和大祓神事が行われる。帰りは自動車を使い、住吉大社に到着後、還幸祭が行われ、21時ごろに祭りが終了する。

祭りの由緒など：住吉大社では、数年前まで、この夏越祓の際に用いる茅の輪の材料となる茅ちがやを、実際に境内で栽培していた。しかし年々その量が減少し、それが人びとに手渡すことができない量まで減ってしまったため、今ではその栽培自体をやめてしまったということである。そのため最近では、茅を地方から取り寄せ、それを結って三つの茅の輪を作っている。しかし結うのは神主ではなく、茅の輪を作る役職に当たっている氏子の人びとによって行われている。また、この茅の輪の茅は持ち帰ってもよいとされており、参拝者は茅を持ち帰り自分で小さな輪を作るといふ。

（7月31日調査：福島たえ・森本安紀、
8月1日調査：黒田一充）

【補記】

この大阪の夏祭り調査は、大阪府・大阪市・（財）大阪21世紀協会などを中心とする大阪ブランドコミッティによる大阪の新しい魅力（ブランド資源）を発掘する調査事業の一環でもある。

夏休みカレンダーの作成と現地調査の報告は、春学期末の非常に忙しい時期にもかかわらず、大学院生たちが精力的に取り組んでまとめたものである。あらためて、感謝したい。また、これらの報告については、今回の掲載に当たって、黒田が語句の統一や整理などを行っている。

（本稿は、2005年9月10日に行った2005年度第1回祭礼遺産研究例会での報告をもとに加筆・修正したものである。）